

要約筆記の歩み

入谷順子

要約筆記は誰が、何のために考え出したものでしょうか。

難聴者は対話がしたかったのです。難聴者は、自分で話すことはできませんが、他人が話している内容は聞き取ることができません。

集まった人たちが、どんな話をしているのか、その話し合いの場の中に入り、自分も聞きたいとの思いを難聴者が詩にしています。(資料)

これは、全国難聴者協会の初代会長の林 瓢介氏の詩です。

対話は、知らない人との間の情報の交換や、知っている人同士でも価値観が異なる時の摺り合わせです。

NHKのアナウンサーの山根基世さんは、心を合わせて一緒に番組を作る時に気づいたことを語っています。

「相手を説得してねじふせるのではなく、相手にもなるほどと納得してもらわねばなりません。そのためには、相手の反対意見をきちんと受け止め、その上で、自分は別の意見を持っていることを、決して感情的にならず、論理的に、しかも相手の心に届く言葉で語らなければなりません。」と。

曖昧な感情や雰囲気、ニュアンスも大事にしながら、少しずつ相手とコミュニケーションを行い、やがてお互いに共有できる価値観や概念を生み出していく。私的なものから出発し、それが次の段階では、価値観や文化的な背景が違っても、ある程度は理解可能な「個別な」表現となり、やがて公的なものにたどり着く。逆の流れもある。この全体が「対話」という営みです。

他の人と対話をしたい。他の人がどんな気持ちでいるのか、どんな意見を持っているのかを知り、自分の意見も言いたい。と願い続けて実現したのが、1973年京都で開かれた全国難聴者組織推進協議会の時でした。

初めてスクリーンに映し出される文字にびっくり。「たまげた!」「聞こえないことを忘れていた!」と、大きな感動を呼び起こしました。

これをきっかけに各地域で難聴者の組織作りが広まりました。

1970年頃から、手話通訳者、難聴者、国語学者などが集まって、難聴者コミュニケーションの保障を求めて研究を始めました。その内容は、1979年京都府・市難聴者協会から『中途失聴・難聴者に「聞こえの保障」を』(要約筆記研究叢書 No. 1～3)3冊にまとめ発行されました。

その中で、『早く、正しく、読みやすく』を要約筆記の三本柱とする技術の基本を示し、「要約筆記」は、決して「要約する」こと自体が目的でなく、それは単なる技術的手法である。できる限り話をくわしく伝えるよ

うにするべきであるとし、話の7～8割を書くことを努力目標としています。

要約筆記者に求められる姿勢として「難聴者の発言する権利、聞く権利を保障すること、難聴者集団と共に歩むこと、要約筆記の制度化を難聴者とともに要求していくこと」などを求めています。

1978年難聴者の全国的組織「全国難聴者連絡協議会」（全難聴の前身）が結成されました。

全難聴が、国へ要望を出し、1981年要約筆記奉仕員養成事業が、国の障害者社会参加促進事業（メニュー事業）に加えられました。

『聞こえない』というのは、どんな障害でしょうか？

「聴覚障害者が人間として生きていく上での至難さは“言葉が聞こえないというコミュニケーション障害”の部分にある。

更に言葉が聞こえない不自由さは、本人に終始する障害でなく、人と人との＜交わり＞のあるところ、いつでも、どこでも相手をも巻き込んで起きるのがその本質。聴覚障害者のコミュニケーション障害は、人間に特有の人的・社会的障害といえる。」

「聴覚障害への理解を求めて」津名道代 著

『話し合い』は、「聞くこと」「考えること」「話すこと」の循環です。

発信者

↓

「聞くこと」←要約筆記者 意見をきちんと聞き取り文字にして伝える

↓

「考えること」←難聴者 意見を読むことで、考えを広め、深める

↓

「話すこと」←難聴者 自分の意見をまとめ、話す

各地域に難聴者運動が広がる中で、「もっと情報を伝えてほしい」「もっと早く伝えてほしい」という難聴者の要望に応じて、「二人書き」や「パソコン通訳」などの研究が進みました。

これらの全国各地域で取り組んできた内容を要約筆記奉仕員カリキュラムとして、1999年厚生省から各自治体に通達されました。

約10年経過して「話に迫いつく同時性は、難聴者の社会参加を後押ししていく」と主張する『全難聴』、『全要研』や、関西中心に難聴者の声を大事にして活動している『要約筆記を考える会』、文字情報の正確な伝達を目指している『文字通訳研究会』等の活動が広がっています。

難聴者は、話すことはできますが、話を聞き取ることができません。聞こえる人が話の内容を文章にして伝えるとコミュニケーションが成立します。話し言葉を書き言葉に仲介するのが、要約筆記者です。

仲介者の役割は、話し手の内容をしっかり聞き取り、話し手の主張を理解して、読みやすい文章にして伝えます。

文章とは、「人を説得するために書くもの」というのが定義であり、文章の目的は、説得することです。

説得する文章にするには、『話し言葉』と『書き言葉』の特徴を理解しなければなりません。

＜『話し言葉』は「今、ここ、私」が共有される時に使う言葉である。

『書き言葉』は、暗黙に共有された「今、ここ、私」という主観的で特殊なフレームを「いつ、どこで、誰が」という客観的で一般的なフレームに反転・変換した言葉遣いのことである。＞

『文章術 読みこなし、書きこなす』工藤順一著（中公新書）

＜加えて、最後にちょっとした気配りで、文章は読みやすくなる。

(1) 文末に気をつける

話すということは、「自分の考え、意見」を表明することだから「と思う」「と考える」と、いちいち断る必要はなく、「何々だ」「何々である」と言い切ればよい。

(2) ひらがなを多くする。

ひらがな六割、漢字四割がめやす。七、三も可。

(3) 文体を統一する

「だ・である体」（常体）と「です・ます体」（敬体）は、混用しない＞

『日本語作文術 伝わる文章を書くために』野内良三著（中公新書）

同時通訳は本当に「同時」にできるのでしょうか

＜話の内容をわかりやすく伝えるためには、まず通訳者が話をよく理解しなければならない。そのためには、通訳者は、聞いたことにすぐ反応するのではなく、少し待って話し手の言うことを聞く必要がある。話し手の内容が解れば、少しずつ遅れながら、話し手の話の流れに乗っていくのが同時通訳のコツである。

正しい同時通訳では、話し手の話の進行と通訳者の訳の進行との間に、常にいくらかの時間のズレができる。この時間のズレのことを『耳と声のズレ』という。通訳者が、聞いて理解したことを伝えるのは、人間本来のコミュニケーションの原理にかなった行為なのである。＞

『英語の通訳 日本語』 小松達也著 （文芸春秋）

(資料) 詩集 「中失者」 林 瓢介 1973年

屈辱

耳が悪いので
会議テーマと私の意見が
あまりにもズレたため
思わず失笑がおこった

いつも つつましい
教養のあるインテリ婦人たちの
笑い声は とくに高かった

そして私の障害を知っている
いくたり
幾人かの婦人だけが
笑いかけて口をつぐんだ

私は屈辱と恥しさで
身のほてる思いをした

(44年・大阪の婦人集会で)

完全疎外

障害者全体の集りで
盛んな討議が行なわれる

盲人代表も負けてはいない
手話通訳者を中心に
ろうあ者もグループをつくり
会議の進行を知る

だが何一つ知らされず
石のように黙りこくっている
ひとりの人間がいる

それは重度の中途失聴で
手話も読話も
何も知らない私なのだ

この悲しみを誰が知ろうか
憤りを誰が知ろうか……